

今年の夏、ウィーンと
プラハとザルツブルグに（上）



1938年3月15日、オーストリアを併合したヒトラーはこのバルコニーから演説し、集まった数万人のウィーン市民に熱狂的に迎えられた。

仕事の関係で知り合って二十数年になる中国系マレーシア人の友人（ラウさん、国際原子力機関（IAEA）、勤務）が三年前からウィーンに移り、原子力発電所の核管理を監視する仕事をしている。こちらに在る間に遊びに来たらと言われていたので、今年の夏二週間の日程でウィーンに行った。彼のアパートに滞在し、プラハとザルツブルグを往復した。一人旅はそれはそれで大変だったが、緊張感で過ごす毎日は貴重な得難いものであった。慣れた頃に帰ってきた印象が今ある。

何とか往復一桁万円で収まる航空券を探していたら台湾経由の便があった。台北での待ち時間が十時間と長かったがそれは安いものだからしかたない。名古屋から台北、台北で十時間の待ち時間（おかげで市内観光が出来た）、台北からウィーンと、ほぼ一日がかりでウィーン国際空港に着いた。ラウさんのメールには、空港で国鉄に乗り換えウィーン北駅で下車、プラットフォームで待つこと、プラットフォームから出たらもう探せないから絶対にそこから動かないように、とあった。空港で鉄道の切符の買い方を教えてもらい、列車に乗る。ホームで緊張して待っていたら約束の時間に来てくれた。すぐアパートに向かう。

ラウさんは急に入った仕事のため明日東京に発つという。明日からまったく一人である。スペアキーを借りてその使い方を教えてもらう。オートロック方式のドアだったので、鍵を室内に置いたまま出るともう部屋に戻れない。パスポートも取り戻せない。ゴミを出すときはいつも、鉄道の人が線路を横断するときやるように、ポケットに鍵、オーケー！ と指で確認していた。

ウイーン市内では自転車で走っている人をよく見かけた。自転車専用道路もあった。そんな人がそのまま地下鉄に乗られるよう地下鉄のドアは大きく広く開く。自転車に乗った人がホームでおりて、頭にすっかりヘルメットをしたまま自転車を転がして車内に乗り込んでくるのはちょっと見慣れない素敵な風景であった。乳母車もそのまま入ってきた。地下鉄、市電、バス乗り放題の共通券がありそのお世話になった。地下鉄と市電を乗り継げばどこにでも行けた。ウイーンはそれほど大きな都市でないので、くたびれるとアパートに戻り、また出かける、そんなときこの乗り放題の券はとても便利だった。

借りていたアパートの近くに公園があった。後ろに大きな教会が建っていた。夕方に

なるとどこからともなく、人々が集まってきてベンチに座りおしゃべりが始まる。人々は戸外で話す。若い人は若い人と、老人は老人と、暗くなるまで。そういえば、ずいぶん昔イタリアの小都市フェラーラでも同じような光景を見たことがあった。町の中心部にある教会の下の広場に夜になると人々が集まり、しゃべっていた。

ウィーンでもああ同じだと思った。私はそれらの人々をベンチに座ってながめる。会話の内容はさっぱり分からないが、みんな熱心に何か話していることだけはよく分かる。二人の青年がバイオリンとアコーディオンでワルツを演奏していた。彼らの前にバイオリンケースが開いたまま置いてある。通りがかりの小さい子供が足を止めて踊り始めた。くるくる舞って楽しそうだった。演奏が終わるとその子は小さな拍手をして、親からもらった小銭をバイオリン弾きのケースに入れた。

(二〇〇五年八月一六日)